



辞書指導の不易と流行 ——『ベーシック ジーニアス』を使って



西尾 克哉

1. 紙の辞書は素晴らしい

教育の現場へIT機器がどんどん導入され、学習環境が大きく変わってきています。英和辞典に関しても最近では電子辞書を使う生徒が増えてきて、それを薦める学校も登場しているようです。しかし、辞書をツールとして使いこなすためにはまず紙の辞書を引きこなせるようになることが不可欠だと私は思います。電子辞書は携帯に便利で、英語ができる人にとっては強力な武器になります。その一方で、英語を学び始めた中高生には十分に使いこなすことは難しく、英語ができない要因になることが少なくありません。

電子辞書では用例や語法などを見るときにその都度クリックしないとなりません。画面上に一度に表示される情報も少なく、スクロールする手間は面倒です。iPadさえ、一度に表示される情報量は少ないです。電子辞書で必要な情報を探り当てるためには、そもそも辞書にはどのような情報がいかに記述されているかを熟知し、それが電子辞書では階層化されて配置されていることを知らないとなりません。しかし、生徒はそれを理解していません。その結果、電子辞書を使う生徒にとって用例や語法などの情報はないに等しく、優先的に表示される日本語の訳語を求めるだけになってしまいます。また、語義訳語を比較検討するためにスクロールする手間を惜しむので、最初に出てくる訳語だけで処理しようとしています。

紙の辞書では語義訳語の後に用例や解説が続いて載っているのだから、紙辞書の利用を続けると、記載してある情報にどのようなものがあり、いかに

記述されているか、自然と知ようになります。基本語には非常に多くの情報が載っていること、品詞によって区分してあること、訳語以外に語法や文化的な背景に関する説明があること、そういう辞書の姿を知り活用できるように指導することが大事です。語義訳語や用例の比較、それに伴う語法解説などに目を走らせ、今必要としている情報に早くたどり着くために辞書で調べることを続けるとアイスパンが広がり、速読や情報検索の力を養う効果があるのではないかと思います。

2. 辞書のボトムアップ的利用

未知語が出てきた場合、英語が苦手な生徒ほど辞書の最初の方にある訳語だけを見てそれを無理に当てはめて sentence や passage を理解しようとしています。そこで私は適切な語義を見つけ出すために、まずその語と同じような用法の例文を辞書で探すよう指導しています。勤務校の2年生が使用している検定教科書 (*MAINSTREAM English Course II*) の英文をもとに、その実例を紹介します。

The shark came up and attacked me. It pulled me back and forth. It was about a three-second period. When it was attacking me, all I saw was like a gray blur. (Lesson 5)

この all の使い方と同じものを辞書の用例から探さない、という指示を生徒に与えます。その時、訳語から考えるのではなく、まず似たような形の例文を探ることが大事だと強調します。生徒の大半はなかなか探すことができません。all か

ら始まっている例文はないか、そういうヒントを与えながら何とか例文を探し続けることを促します。すると見つけた生徒から声が上がります。それに刺激され、何とか見つけようと一生懸命になる生徒も出てきます。『ベーシック ジーニアス英和辞典』（以下『ベーシック』）には適切で分かりやすい用例と解説（書き換え）が載っています。

All that is heard is the sound of waves. 聞こえるのは波の音だけだ (=I hear only the sound of waves.)

このような only のニュアンスを持つ all は非常に重要でよく出てきますが、最初に載っている語義訳語ではそれが全く分かりません。用例から単語を調べることが重要だと分かる好例です。

『ベーシック』は例文ごとに改行しているのだから求める例文が見つけやすく分かりやすいという特長があります。いくら重要な情報であってもギッシリ詰まりすぎていて生徒にそれが届かないのでは意味がありません。情報量の多さより、分かりやすさが初学者（一般の中高生）には求められる場合が多いということを強調しておきます。

同じレッスンからもう一つ。

After several attempts, she caught a wave and rode gracefully to the shore. The whole beach exploded in cheers and applause.

この whole も、しっかり用例や解説を見させたい単語です。『ベーシック』の例文では、

The whole village welcomed the president. 村中こぞって大統領を歓迎した《◆ all the villages は「全部の村」》

となっています。whole は形容詞だが、日本語では副詞が対応することが多い（「村の人はみな」）。用例の日本語訳を参照しながら、そういう解説が必要でしょう。辞書の記述だけですべて分かる生徒は少ないので、指導者の出番は決して減りません。むしろ、こちらの腕の見せ所と言えるでしょう。whole の項に載っているイメージ図に注目させることで、訳語だけに頼る学習から抜け出す契

機を与えることもできます。最近は認知言語学の影響もありコア・イメージを載せる辞書も多くなっていますが、『ベーシック』はその先駆けとも言えます。

このように演繹的に情報を検索することができない単語を帰納的に調べさせることによって、辞書の情報がどのように構造化されているか理解することが可能になり、その結果トップダウン的検索ができるスキルも身に付くのです。初学者にとっては、電子辞書が決して重宝ではないということが分かっていただけではないのでしょうか。

3. 辞書を創る、辞書が創る

やさしめの高校生用学習辞書の多くは、色づかいも派手で紙面はげばげばしい感じがします。中学生用辞書と比べても幼稚な印象を与えるものもあります。それに比べて、『ベーシック』は非常に落ちついていて図書館で開けて勉強しても引け目を感じることはありません。このようなことは学習者にとって決して看過できない点であることを強調しておきたいと思います。紙の辞書は自分が調べたところに線を引いたり、付箋を貼ったり、書き込んだり、自分なりの学習の足跡を残すことができます。次に調べたときに、その足跡を確認し達成感を持ち、また辞書を開けたくなる生徒もいます。創っていく辞書としても、色づかいが控えめで余裕のある紙面構成が適しているでしょう。辞書を創り、辞書に創ってもらう英語学習、そういう手作り感が大事だとあらためて思います。

教育であれ、辞書であれ、高邁な理念が学習効果の高さを保証するわけではありません。生徒の現状に降りてきてくれ、そして引っ張り上げてくれるものが学習辞書として優れているのです。常に側にいてくれる頼りになる存在、そういう思いを一人でも多くの生徒が辞書に抱いてくれればと願い、“私の”辞書指導を続けていくつもりです。

（にしお かつや・武庫川女子大学附属高等学校教諭）